

農業環境における放射線影響ゼミナール（大学院）

農業環境の放射線影響（学部）

アンケート（平成 29 年 4 月 10 日）

1. 食の安全を消費者の視点で考えるとき、必要なのは安全性と安心感の両方であると考えます。安心感に関しては行政のプロジェクトや農家、自治体、県民の努力に依るところが大きいのと思いますが、安全性を証明できるのは研究者が出すデータや数値であり、これらを広く誰でもアクセスできる状態にしておくことの重要性を改めて感じました。
また復興を考えてみると未だに風評被害による価格低下や購買意欲の減少は続いており、何とかして福島をブランド化できないかと考えてしまいます。他県では行われていない全袋検査やサンプリングにより安全性は確認されているため、これが安心感につながるような取組みが求められるように思います。
最近の記事で、国の定める空間線量が厳しすぎるのではないかと、避難する必要のない人まで避難させているのではないかと訴える論文がリリースされたことを知りました。まだ論文本体を読んでいないため意見は定まっていますが、日本の厳しすぎる基準を見直す、あるいは逆に基準値を下回る地域、食品の安全性を保証する機会になればと思っています。
2. ニュースでたまに「基準値には合理性が無い」と批判している人が紹介されているが、今回の講義を聴いた限りでは、ある程度合理性はあるように感じた。
食品の線量よりも医療機器の線量の方が注意すべきだと感じた。検査をしないで病気の発見が遅れるのと、検査による被曝を天秤にかけて判断していかないといけないと思った。
親の実家が茨城で農業を営んでいるが、機械の掃除は水洗いをざっくりやる程度で、もしかしたら放射能が蓄積されていっているのかもしれないと感じた。
全袋検査をしている福島産の米の方がむしろ、他県産の米より安全なのではないか。
森林に関しては、土壌処理を行うことが困難であるため、林産物の線量が減少しにくいことが報告されている。実際、処理を行うことは多大なコストがかかると思われるが、今回紹介されたカリウム施肥を応用し、土壌表面にカリウム粒子を散布する方法であれば、空中散布も可能であるためコストが多少は下がるのではないだろうか。既に研究が始まっているのであれば結果が知りたい。
3. これまで、森林における土壌や枝葉に付着したセシウムに関する研究事例はいくつか見たこともありましたが、農作物関連の話は普段あまり聞かなかつたので、今回改め

て農産物の話を聞くことで現状を知ることができ、とてもためになりました。農産物は口から体内に入るものなので、安全管理はとても大事だと思います。全量検査をしてくれるとやはりかなり安心できます。ところで、ベルトコンベア式とゲルマニウム半導体検出器とで時間がかかなり違うように感じました。全てベルトコンベア式が良いのではないのでしょうか。精度の問題ですかね。何にせよモニタリングを続けることが重要だと思うのでこれからも頑張っていきたいと思います。

4. 授業では主に"物理的"半減期を元に説明されていましたが、生物への影響を考える上で"生物学的半減期"も考慮する必要があるのではないのでしょうか。

カリウム施肥によるカリウム"過剰"の悪影響などは考えられますか？

「放射線の健康への影響」について、仮に年間 200 mSv の放射線影響を受けている場合、その人が生涯 200 mSv の影響を受けていた場合に、ガンによって死ぬ確率が 1%上がるということでしょうか？それとも毎年 1%ずつ上がっているということでしょうか？また、ガンの"発生率"では、どのくらいの高さになるのかも気になりました。

抽出検査について、各市町村の規模や生産量に関わらず、3 点以上となっていました。大規模な市町村の場合、場所によって放射線濃度が変化することが予想されるので、生産地の場所や規模によって、モニタリングの量を変えるべきなのではないのでしょうか。

もちろん数値からしたら福島食品が安全であると分かりますが、未だに根拠のない不安によって避けてしまうのが消費者側としての正直な感想です。(あくまで個人的な感想です)

5. 福島県の農作物の放射性物質を下げる取り組みや、安全性を評価する取り組みを今回の授業で知ることができた。

福島の人たちの様々な努力が積みこまれた福島県産の食べ物を積極的に食べたいと思った。

福島県の土壌に含まれるセシウム濃度が低くなれば、福島県産の畜産物に含まれる放射性物質も減るのだろう。

除染の効果が高いとされる表土剥ぎ取りだが、やはり土の置き場の問題は大きいと思った。

セシウムの半減期をよりはやめられるような技術があればいいと思った。

6. 基準値の根拠について、正確に理解していなかったのも、とても勉強になりました。

行政が定める基準値がすべてロジカルである必要はないと思いますが、それでも基準値を少しでも緩めることができれば、それだけ不要な心配をせずに済むし、コストも抑えられることは確かなので、例えば、120 ベクレルを 100 ベクレルに丸めたりする

ようなところはもう一度考え直す余地があるのでは、と感じました。また、年齢や実効線量係数などが最大値を考慮しているのに対して、食物の年間摂取量と国産割合については平均に近い値が採用されていることを、少し不思議に思います。

7. 震災から6年が経過し、被災地や原発事故に関するニュースはほとんど見聞きしなくなった一方で、原発いじめの話題に代表されるように原発事故に対する風評被害は依然として強く残っているように感じる。今回の授業を受けて、放射線や物理を専門としていない自分でも、きちんと説明されれば現在の放射性物質の基準量や流通段階での検査が十分すぎるほど十分であると理解することができた。一般の人でもより身近にこうした安全基準や放射線について学ぶ機会があるようになれば時間はかかっても福島の農産物に対する偏見を軽減していけるのではないかと思う。一方で、産業として福島の農業を考えたとき、表土のはぎとりのような一見大変有効に見える方法でもはだ土の処理や土力の低下のような問題を抱えていたり、生産物の価格が戻らなかったりともまだまだ課題は多くあり、農学の貢献できる余地も同様に大きいと感じた。

【質問】東大農学部が市民講座のような形で今回のような講義を一般の人に提供する機会は多いのでしょうか？

8. 震災以後の放射線汚染状況を、しっかり数値でモニタリングして把握していることがよくわかりました。特に米を全てモニタリングすることには驚きました。表土のはぎとりはニュースで見たことがありましたが、カリウム施肥による汚染防止を国が補助しているのは知らなかったです。生産された作物や土地の放射線量の安全性は十分にアピールできていると思うので、汚染土壌など、まだ残っている問題の解決の見通しが立てば、さらに福島のイメージは改善するだろうなと思いました。また、農作物については、安全基準を満たしていることだけでは、他県へのアドバンテージにはならないので、更に厳しい基準を満たした作物にブランドをつけて売るなどをして、価格の回復を図れるのではないかと思います。

9. 昨年ですが、ある埼玉県のあるせんべい工場が原料に『福島米』と書かれた袋を見ました。おそらく科学的に検査された「安全」な生産物でも、原料米に使用されるほどのその価格の低さに関東人の「安心」が得られていないと思いました。広島産の「カキ」や長崎産の「ジャガイモ」にもかつて風評被害はあったのでしょうか？またあった場合、被爆後何年くらいで除染され、また風評被害は収束したのでしょうか。風評被害が続く場合、国の（例えば国会の）食堂などで買い上げ、「安心」を得ることが必要ではないかと思いました。